

校長先生のあのね帳 3月2日 NO147

節目の3月

先日、思いがけないお客さんが来られました。石橋南小学校出身で、1997年4月から1999年3月までの2年間、5年と6年を私が持ち上がりで担任したAさんでした。

当時、私の学級で作っていた文集「えんぴつ」を読みながら思い出を語っていくうちに、「小学校で学んだことが、大学生や社会人になった時の考え方のベースになっています。」と話してくれました。

また、次のようにも語っていました。

「6年生で学んだ「やまなし」でやった<光の網はあるのか・ないのか>の話し合いは今でも覚えていて、ある・ないの二つではなく第3の選択肢を考えてみるという考え方は今の仕事に役立っています。」と。

小学生に日々接し、指導する教員として肝に銘じなければいけない言葉だと思いました。

放送委員会による今回が初のダンス大会の様子を収めた録画を見てもらいました。Aさんたちが在校時に始まったカラオケ大会がこのようにまだ続いていることに驚いていました。また、ダンスのうまさに感心していました。

学校は地域の中心。特に、小学校はその核と言われます。在学中も卒業してからも、自分の心の故郷として胸に宿っていることを感じた1時間のお話でした。

その石橋南小学校に担任として10年、管理職として8年間勤務できたことは私にとって僥倖でした。保護者のみなさんや地域にお住まいのみなさんのご理解とご支援がなければ途中で座礁していたと思います。ありがとうございました。

まだコロナ禍ではありますが、卒業式を17日に、24日には修了式を控えています。残りの日々、感染予防を含めてしっかりと準備を行い、あとは子どもたち、教職員、保護者のみなさんのお力を借りて思い出に残る式にしたいと思っています。

(学校だより3月号より)